

報告1/最近の朝鮮半島情勢**- 金正日訪中、哨戒艦事件、国防委員会人事を中心に -****平岩 俊司 (ひらいわ しゅんじ)****関西学院大学 国際学部教授****はじめに**

本日は最近の朝鮮半島情勢について大きく3つに分けて話をする。一つ目は、金正日（キム・ジョンイル）の訪中についてである。本年5月3日から7日にかけて、金正日が中国を訪問した。前回、高原先生と大橋先生のご報告の際に、高原先生からご質問いただいたことも含めてお話しをさせていただく。二つ目は韓国の哨戒艦事件である。これはまだ現在進行形であり、今後、国連安全保障理事会で議論が行われるであろう。韓国はワールドカップサッカーで決勝リーグに進出したが、国連は残念ながら韓国の思い通りになかなか行かず悲哀を感じているだろうと思う。三つ目は、国防委員会の人事である。本年は最高人民会議が異例な形で1年に2回行われた。今まで年に2回開催されたこともあったが、4月に開催してまた6月9日に開催するという、間が一月しかないタイミングであったことで、とりわけ日本のメディアは後継者問題との関係から関心をもった。結果的には、後継者問題についてはよくわからないのだが、それも含めてお話しする。

現在、朝鮮半島情勢といえば、基本的に、北朝鮮を中心とする問題が大半となる。北朝鮮を巡る諸問題という、昨年の暮れに行われたデノミも重要であるが、より北朝鮮経済にとって重要だったのは通貨交換を行ったことである。通貨交換の際に交換上限が設定され、これに伴う経済的混乱があったと大きく報じられた。ただし北朝鮮の公式メディアが通貨交換とデノミについて、その内容を報道したわけではないので、実態はよくわからない。韓国やその他の情報によるところが大きい。韓国の人に聞くと、韓国での北朝鮮の情報の取り方が以前と随分変わってきている。韓国にいるかなりの脱北者の人たちが北朝鮮国内にネットワークを持っており、通貨交換のようなことが起きると、携帯電話で「今どうなっているのだ」と定点観測で情報がとれる場所がいくつかある状態だそうである。もちろん北朝鮮全体についての情報はなかなかとれない。今回かなり経済的な混乱があり、交換の上制限に対する不満も非常に大きかった。中国同様、上に政策あれば下に対策ありということらしく、上限があっても、街中で食べるものがなくて、ごろごろしている人間を雇って、1割くらいの小遣いをやるから通貨交換してこいとして、大量にお金を換える人もいて、小金を持っている人たちが破産するという状況ではなかったようである。ただし経済的な混乱が起きたことによって国防委員会の人事に関連したものがあつたともいわれている。北朝鮮は経済的に非常に厳しい状況にある。

次に後継者問題であるが、私は非常に慎重な立場をとっている。メディアやその他では金正日の三男が後継するのではないかと、いうことを前提にして情報がでてくる。しかし、今

の段階では後継者が誰かというよりは、もう少し雑駁に大きく今後の方向性を考えたほうがよいのではないかと思う。

そして焦点となるのは核とミサイルの問題である。これが本来中心となるべきだが、デノミや哨戒艦の問題が中心的な話題になり、核・ミサイルの問題が脇に追いやられてしまっているのが今の北朝鮮情勢であろう。のちほど久保先生からお話いただけるかと思うが、私の印象では、北朝鮮は去年4月にミサイル発射実験を、5月に核実験を行い、いよいよアメリカとの交渉の時期であるという位置付けをしていたのだと思う。そのメインとなるテーマは、1953年に国連軍・アメリカと締結した休戦協定を平和協定に変更する協議を行いたいということである。体制を維持するためには、アメリカからの脅威を除去しなければならない。アメリカからの脅威を除去するには、休戦協定、いわゆる準戦時体制下にあるわけだから、平和体制に移行するためにはアメリカと平和協定を結ぶ必要がある、というのが北朝鮮側の理屈である。国際社会は6者協議に復帰するよう求めたが、北朝鮮は昨年的人工衛星発射実験と彼らが称しているものが国連で扱われた段階で、もう2度と6者協議には復帰しないという強い姿勢をとっていたのである。その後、アメリカや中国の働きかけの結果、6者協議再開にも基本的には積極的な姿勢をみせるようになったという状況である。

私の印象では、去年、アメリカがもう少し積極的に北朝鮮の交渉に応じるのではないかと思っていた。もちろん、オバマ政権にとって、核の問題について北朝鮮が現在やっていることはまったく逆行するので、「核なき世界」を前提にすれば北朝鮮に安易に妥協することはできないであろう。しかし例えば、去年の7～8月にクリントン元大統領が、北朝鮮に拘束されているアメリカ民間人を救出し連れ戻すために訪朝した。つまり米朝の間での接触、交渉はある。アメリカ側も北朝鮮が6者協議の再開について積極的な姿勢を見せており、なおかつその感触も得ているという報道もある。しかし、今年の前半には、北朝鮮が望むような形でアメリカと平和協定締結の協議を行うことは難しいだろうという判断をしていたようだ。その状況の中で哨戒艦事件が発生した。

順番が少し前後するが、哨戒艦事件の前に金正日の訪中問題がある。アメリカとの関係に閉塞感がある時に中国との関係強化を図るのは今までも金正日がやってきたことであるが、通貨交換による経済的混乱で中国との経済協力問題が少し話題になった。6者協議への北朝鮮の復帰、さらには、哨戒艦事件との関連で中韓関係への波及ということがあった。

哨戒艦事件についてはあとで詳しく話すが、これも韓国と北朝鮮の間の南北関係である。哨戒艦事件が大きくなったのは、つまり事件の問題化のプロセスを考えると多分に韓国内問題である。韓国の統一地方選挙が事件の直後にあり、韓国側がどうしてもこの問題をあいまいにできなくなってから問題がかなり大きくなったように思う。さらに、安保理での制裁論議は中国との問題であるが、韓国にとって悲しい、寂しい状況がかなり強くなってきていると思う。

その直後に行われた2度目の最高人民会議では国防委員会の人事が行われ、体制固めがなされたであろうという概観である。以上を前提にして、3つの朝鮮半島情勢を中心にもう一度詳しくみていきたい。

1. 金正日訪中問題

5月3日から7日に金正日が中国を訪問した。新義州から、丹東、大連、天津、そして北京に入り、瀋陽、丹東、また新義州にもどってくるというルートであった。去年の暮れ頃から、今年金正日が中国を訪問するのではないのかと、ずっと言われていた。去年は中国と北朝鮮の国交関係樹立60周年の年で、10月には中国の温家宝総理が北朝鮮を訪問した。しかし、去年の前半は北朝鮮が核実験・ミサイル発射実験を行ったために、中国が国連でずいぶん苦勞し大変な思いをさせられた。10月以前には中朝間の齟齬が様々な形で報道されており、実際かなりギクシャクした部分もあったと思う。10月の北朝鮮訪問では、温家宝総理が北朝鮮側の配慮で毛沢東の息子の墓に参拝したことが話題になった。毛沢東の息子は朝鮮戦争で戦死している。中朝関係の皮肉な話として、金正日は朝鮮戦争の時に中国に避難し、毛沢東の息子は朝鮮戦争で死んだ、ということがよく言われる。10月以降、中朝関係は比較的安定的に推移をしているようで、金正日も答礼として去年のうちに中国を訪問するのではないかという噂があった。去年の11月末から12月にかけてデノミや通貨交換による混乱があったので、今年の前半に訪中するのではないかとも言われていた。ある中国の専門家によれば、首脳訪問は、全人代（全国人民代表大会）の前に行い、そこで北朝鮮側は中国側の正式な予算の中に経済協力を組み込んでもらうのがいつものやり方であるので、今年も全人代の前に訪朝するのではないか、ということであった。結果的には、全人代の前ではなく5月3日～7日のタイミングとなった。

ここで国際社会が関心をもったのは6者協議の再開問題についてである。対米関係の閉塞感が北朝鮮側にあった。私の考えでは、6者協議再開問題、とりわけ対米関係の閉塞感について中国の役割を期待するのであれば、去年の暮れから今年の前半にかけては米中間が少しギクシャクした時期だったので、その後核サミットで米中関係が回復した時期が北朝鮮にとって訪中の良いタイミングであったと思う。

さらにより直接的な問題として哨戒艦事件の問題があったのではないのかといわれているが、中国側はこれを否定している。初めからこの時期に予定されていた訪中であり、哨戒艦問題が発生したから金正日が訪中したわけではない、という報道がなされている。実際どうなのかはよくわからないが、哨戒艦の問題のために金正日が訪中していないとしても、中国と北朝鮮の間で哨戒艦の問題は必ず話題になったはずである。

5月5日、6日の2度にわたって胡錦濤と金正日の会談が行われた。この訪中に関して具体的に表に出てきたものは、胡錦濤主席が5つの分野で協力することを提案したことである。これは前回、高原先生から指摘があったとおりであるが、1) 指導者層の交流継続、2) 戦略的疎通の強化、3) 経済貿易協力の強化、4) 人文交流の拡大、5) 国際・地域問題で協力強化、の5つである。この中でポイントとなるのは、2) の戦略的疎通の強化で、「両国は毎回あるいは長期的に両国の内政・外交での重要問題や、国際・地域情勢、党・国家統治の経験など共通の問題について、深度ある意思疎通を図る必要がある」と述べている。これを金正日が受け入れたと言われている。

ただし、もちろん北朝鮮側はこのような報道はしていない。勉強不足で申し訳ないが、中国側が正式に発表した文章なのか、調べてみると中国のCCTVの報道のようである。他には新華社でも流れたようで、それはオフィシャルなものだと考えてよいと思うが、その後、表

面にはあまり出ていない話である。

2) で内政について言及しており、内政干渉を北朝鮮側が認めたという指摘がよくされる。しかし、文言を読めば、例えば、デノミや通貨交換等の混乱についてお互い情報交換をしましょう、という程度のことであればそれほど大きなものではなく、中国が従来立場から大きく踏み込んで北朝鮮に対するコミットメントを強化しているということでもないように思う。相互主義に立ち、逆に言えば、北朝鮮が中国の内政に関与することは、あり得ない話である。これを前提にすれば中朝関係の強化ということになるが、この文言だけをとりえて中国が今までの姿勢を大きく変えたといわれると少し違う気がする。

ちなみに、前回、中朝首脳会談が行われたのは、2005年10月に胡錦濤が北朝鮮を訪問したときで、次の4つの提案がなされている。(1) 引き続き密接なハイレベル間交流を行い、相互の意思疎通を強化する。(2) 交流の領域を開拓し、協力の内容を豊富にさせる。(3) 経済貿易協力を促し、共同发展を促進する。(4) 積極的に協力して歩調を合わせ、共通の利益を守る。毎回同じような会談を繰り返している、というのが正直な感想である。

中国からすれば、哨戒艦との関連もあるが、北朝鮮との関係は冷却化させるというよりは、進化させる方向にある。私の友人が中国と北朝鮮の関係を称して、中国にとって北朝鮮はあってもなくても困る、あればあったで問題があり、国際社会は中国の責任や保護者としての中国を求めている。一方で、韓国が高句麗などの領土に基準をおいて、中国の東北地方に対し韓国の領有権を主張するような動きがあり、さらに言えばその背後にはアメリカがいるのであれば、北朝鮮がないと面倒な部分もある。だからあってもなくても困る存在だと言う。そういう構造からあまり大きく変わっていないのではないかと思う。今の北朝鮮と中国の関係は従来とあまり大きく変わりはないようだ。

2. 哨戒艦事件

哨戒艦事件に関連しても全く同じ印象である。先ほど、哨戒艦事件は韓国の国内問題であると話したが、6月2日に韓国で統一地方選挙があったが、結果的には強硬策が裏目となり予想に反して与党が惨敗するという事態になった。

哨戒艦事件の経緯を説明すると、3月26日に哨戒艦「天安」の艦尾に穴が開いて浸水・沈没し46名が亡くなる事件が発生した。韓国のマスメディアは、当初から北朝鮮の犯行であるとさかんに報道していた。しかし、4月1日に李明博（イ・ミョンバク）大統領が「(過熱気味の報道について) 危険な動きだ。証拠もなしに北の関与だと言う予断を持つべきではない」ということを言った。ところが、その翌日4月2日に金泰栄（キム・テヨン）国防大臣が「内部爆発や金属疲労は考えにくい」と述べた。それに対して4月6日の時点で、李明博大統領は「徹底した科学的調査を行い、国際社会からも認められなければならない。結論ができれば、それを根拠に、政府も断固たる立場をとれる」、すなわち、徹底的に調査をして、科学的、客観的な立場を貫くと述べた。

4月20日の時点に至っても、李明博大統領は「物証が出るまで答えられない。慎重に進めるのがよい」と言っている。当初から韓国側では北朝鮮の関与という意見が当然でできた。しかし李明博大統領はこの問題を大きくして南北問題を犠牲にするのではなく、上手くコントロールして処理しようとしている、との印象を我々は受けていた。ところが、4月後半頃

から雲行きが変わってきた。それまでも韓国のメディアは、政府高官あるいは調査団などのインタビュー等から得た情報で、北朝鮮の犯行だと報道している。4 月後半には韓国国民の大半が、北朝鮮がやったのではない、ということを受け入れられる状況ではなくなった。すなわち、北朝鮮がやったと皆が思うようになっていた。

それを前提として李明博大統領も、これはどうしようもないと思ったのか、あるいは、確証を得たと思ったのか、5 月 4 日に北の関与を示唆し始めた。5 月 20 日には、アメリカ、韓国、イギリス、スウェーデンの 4 カ国の合同調査団が行った調査結果を発表した。その前日の 5 月 19 日には鳩山元総理との電話会談で、李明博大統領が「誰も否定のできない証拠を手に入れた」と言ったようだ。鳩山元総理がそれに対して、「韓国が国連安保理でそういう対応をするのであれば我々は先頭に立って対応する」と言ったようで話題になったと記憶している。

調査結果の報告（の評価）は、非常に難しい。5 月 14 日に事件が起きた海域を底引き漁船で引っ張ったところ、魚雷の破片がでてきた。その破片にはハングルで北朝鮮製と思われる記述があり、北朝鮮製の魚雷であることは間違いないとのことである。問題は、破片が 5 月 14 日という発表直前のタイミングででてきたことである。もしこれがなかったらどうしたのであろうという疑問が一つと、果たして本当に哨戒艦の沈没につながった魚雷なのかよくわからない、というのが専門家の意見の中にもあるようだ。

ただし、韓国を信頼して、北朝鮮製の魚雷であると受け入れたとしても、問題なのは実行犯が特定できていないことである。状況証拠としては、事件の発生の 2 日前に北朝鮮の港から潜水艦が出航して、それ以後の行動は捕捉できていない。そして事件 2 日後の 3 月 28 日に潜水艦が北朝鮮の港に戻ったそうだ。だが、行動がつかめなかった潜水艦の犯行ではないか、というのは状況証拠でしかない。

日本経済新聞に、中国がこれを受け入れるかどうかかわからないという私のコメントが掲載されたら、すぐに韓国大使館から「あなたは信じていないのか？」と電話がかかってきた。「いやそうではない、あれでは中国が納得しないと思う」と述べただけであると答えた。抗議を受けたわけではないが、知人の韓国大使館員数名からそうした指摘をうけ、かなり神経を尖らせていたのだということはわかった。

調査結果について今のところ中国は表向きにはなにも言っていない。まだ調査中、分析中であるが、韓国に対しては、明確に調査が不十分であると伝えているようだ。韓国側から聞いたので多分事実だろうと思う。きちんとしたルートではないが韓国の保守系の大学の専門家から聞いた。中国側は、調査が不十分であることと北朝鮮に釈明の場を与えよ、という二点をかなり早い段階から言っている。

昨日、北朝鮮がこの問題について、国連の安全保障理事会で釈明の機会を要求していると報道にあったので、そういうラインで進んでいるのだろうと思う。ただ、中国のこの動向に対して、韓国はかなり当初から反発をしている。金正日の訪問を中国が受け入れた時点でも大きな不満を言っていた。

韓国は、「北朝鮮をとるのか韓国をとるのか」と、中国側に信頼がもてないと言っている。ただし、私の印象では、中国と韓国の関係には、高句麗問題をめぐって東北工程の問題がある。韓国側が高句麗時代の領土を基準にして、拡大朝鮮という学会の風潮などもあり、中国側がかなり警戒をしていた。中国は 2002 年頃から 2007 年の 5 年にかけて「東北工程」を行

い、結果として中国側は、高句麗は朝鮮の王朝ではなく中国の地方政権だと発表し、大使館か何かのホームページに掲載してしまう。韓国側がそれを嚴重抗議して中国側は記述を削除したが、2000年前半頃からの流れの中で、中国と韓国の間には、とりわけ韓国側が中国側に対して不満があった。

さらに一昨年、韓国の外交官が中国のコンビニでサンドイッチを食べて食あたりになり死亡するという事件があった。当時、韓国外交部の人の話によると、中国側は自分たちの責任は一切認めず、コンビニで売っていたものが多少傷んでいたのは事実であるが、外交官が働き過ぎで耐える体力がなかったから死亡した、と言ったそうである。これについてもおそらく中国に対する不満があったのだろう。

またキムチの輸出入を巡る問題で、これもやはり韓国側にかなり不満を残すことがあった。高句麗の問題、キムチの問題、外交官の問題で、中韓はかなり悪い状況が続いており、特に韓国人が中国に対してかなり悪い認識があった。

その上、今回の哨戒艦を韓国がかなり問題視している中で、(金正日の)訪中を受け入れるとは何事かと、いうことである。韓国は、調査結果は万全で国連に持ち込み中国が仮に制裁決議に反対をすれば中国が恥をかく、と言っていた。しかし、必ずしもそのようになっていないのが今の現状である。

いくつか理由があるが、やはり中国がかなり慎重であることが大きな理由である。それは例えば、済州(チェジュ)島での日中韓の首脳会談の際に、韓国は中国から明確な形で北朝鮮への制裁決議への同意をとりつけたはずであるが、実際にはこの段階で少しトーンダウンしていた。趨勢はその前に行われた米中戦略・経済対話のタイミングで中国のラインはだいたい決まっていたのだろうと思う。すなわちこの時点で、クリントン国務長官が発表した話でいえば、朝鮮半島に新たな危機があるという認識は共有し、平和と安定の必要性についても同意しているが、それを実現するための方法に同意をしたという報道がなかった。中国からすれば北朝鮮を過度に刺激せずに慎重に、となるのが通例である。

実際、米中戦略・経済対話が終わって以降、韓国側の反応を見ていると、当初是が非でも制裁決議といていたが、非難決議を目指すという形に変わった。先ほど述べた鳩山元総理が「先頭に立って」と言ったのも少しトーンが変わらざるを得ないことになる。今に至っても中国は明確な形で調査結果について評価をしてないはずである。繰り返しになるが、韓国側からの話によると、未確認ではあるが、調査結果は不十分であり、釈明の機会を北朝鮮に与えるべきであると、いう二点を言ってきているようだ。

ロシアも先日、調査団を送った。正式な発表かわからないが、少なくとも報道ベースではロシア側は、調査が不十分であり、北朝鮮の犯行として特定できないと評価したと言われている。いかにも韓国らしい話であるが、韓国が人工衛星実験を失敗して、1段目がロシア製であったので、失敗したのはロシアのせいだと言っており、ロシアとの関係を悪くしている。国連での哨戒艦の問題に、どれくらい影響があるのか興味がある。ロシアと韓国の関係は微妙であるが、少なくとも中国は、明確に国際社会に対して、今回の調査結果報告が不備であるとは言っていない。おそらく態度を明確にすれば韓国との関係を悪くするので、あいまいにしたまま政治的に南北の緊張を緩和して収めたい、というのが中国の立場になるのではないか。

3. 異例の最高人民会議

最後に最高人民会議における人事について話をする。冒頭申し上げたように、1993年以前は、最高人民会議が年に何回か開催されていた。しかし、1993年に第3次7ヵ年計画が失敗し、北朝鮮側が認めてからは、最高人民会議で経済指標を発表したくないせいか、年に1回が通例になっている。1年に2回開催されたことも何度かあるが、今回のように、4月と6月、間に一月しかないタイミングで開催されたのは初めてである。そのためあらゆる憶測を呼び、2回目の人民会議で金正日の後継者を指名するのではないか、金正日の後継者が国防委員会のメンバーに入るのではないかと、言われた。もしくは、4月と6月の間に発生した哨戒艦事件関連か、訪中により中国との経済・投資関係の法律を整備するのではないかと、さまざまな憶測をよんだ。

しかし結果的には、開催理由の一つは経済関係閣僚の更迭であった。通貨交換実施に伴う経済的混乱の責任をとって、様々な閣僚が代わったといわれている。一番大きなことは、総理が更迭され、後任が崔英林という80歳の高齢な人物になった。当初、国防委員会の人事で後継者を選び、80歳位の定年制にして高齢者を引退させ、若返らせるのではないかという観測があった。しかし実際は、80歳の崔英林をもう一度起用するという異例の人事であった。実は私を初めとして昔から北朝鮮をみている人間からすると、崔英林は非常に懐かしい名前である。彼は1970年代後半から80年代前半に、金正日が地位を向上させていくプロセスと一緒に地位が上がっていった人物である。当時、我々は、彼を金正日グループにカテゴライズしていた。

呉克烈は、今の国防委員会副委員長で現在79歳と思うが、崔英林と同じで、金正日と同じように地位を上昇させた人物である。90年代に入って、呉克烈は地位を少し後退させたが、昨年4月に国防委員会に突如復帰した。国防委員会の組織を強化するタイミングとして、素直に2人の人事をみると、金正日は上の世代をこの2人に任せた。そして自分より若い世代を任せるには、張成澤（チャン・ソンテク）という国防委員会副委員長に昇格させた人間を起用したのであろう。人間関係については憶測するしかないが、呉克烈がなぜ一時期後ろに下がっていたのかについても権力闘争説などもあるので、金正日が本当に彼を信頼しているのかどうかはわからない。しかし、世代横断的な体制固めをしたことは間違いないだろう。

国内の経済的不調、天安（哨戒艦）の問題も含めて国際関係も緊張しており、なおかつ金正日自身の健康問題も含めて世代横断的な体制固めをしたのではないかと、という分析までは表面に出てくる。ただし、本当に後継者問題につながるのかは今の段階では正直なんとも言えないというのが私の印象である。だからといって三男を否定するほどの材料もない。しかし今の段階で三男に確定なのかといわれると、どうかという気がする。三男確定との根拠になっているのは、噂や情報を別にすれば2点ある。まず、北朝鮮の「足音」という歌の中で、金大将という言葉がでてくる。そして、「金正日の料理人」という本を書いた人物によれば、三男が金大将と呼ばれていた、という2点である。断片的に金正雲（キム・ジョンウン）の名前がポスターに掲載されたということがあがるが、少なくとも全国レベルで展開しているという話ではないというのが今の現状だろう。

さらにいうと、キム・ジョン“ウン”も最初「雲」という漢字を当てていた。韓国語では、「ウン」というのも、「銀」なのか「恩」なのかもしれないということであった。が、料理人

の本には「雲」とでてくるので一時期「雲」にした。だが、彼は朝鮮語がきちんとできないので、区別がつかないようだ。ある筋の人の話によると、在日朝鮮人総連の人に確認したところ、やはり「雲」だと言う人がいる。韓国人によると、「雲」なら男性らしいが、「銀」や「恩」は女性につける名前なので、どうであろうか、という話もしたことがある。

このように、名前も含めて非常に不安定な状態、不確定な情報を前提にして、なんでもかんでもそれに結び付けて報道するのはどうなのかという気がする。

さらに、「金正日の地位向上」については国防委員会の中、つまり軍の中だけの話である。もちろん金正日は80年代の段階で既に朝鮮労働党の中で地位を確立している。当時軍歴がなかった金正日が北朝鮮の最高指導者になるには軍との関係が一番重要だったが、一番難しいのではないかといわれていた。ところが89年6月4日に中国の天安門事件があり、その直前にはチャウセスクが公開処刑されるという事件があり、やはり政治体制の最後の局面に当たっては軍が体制の行方を決めるといふ、ある種冷徹な現実主義的な対応から、軍の中での地位を向上させなくては行けないということになった。当時どういう方法をつかったのかわからないが、やはり軍に経済的にかなりお金がまわるようにしたのだろうと一般的には言われている。金正日はそれまで一切軍歴がなかったが、90年5月24日に国防委員会の第一副委員長になった。今回の張成澤よりも格が一つ上になる。

今、北朝鮮の国防委員会の副委員長は4人いて、第一副委員長は、80歳を越えた趙明禄という高齢の軍人である。実質的にはその4人がやるのだろうといわれている。

金正日は91年12月24日に朝鮮人民軍の最高司令官になり、翌年4月20日には共和国元帥になる。それまで元帥だった金日成（キム・イルソン）は、その1週間前の92年4月13日に大元帥になった。韓国、北朝鮮は、「大」をつけるのが好きなようである。翌年、金正日は国防委員会の委員長になる。金日成は94年7月8日に亡くなるが、金日成が生きている間に正式に譲り受けたポストは、国防委員会の委員長と最高司令官という軍のポストだけである。今の北朝鮮の政治体制を考える場合には、先軍政治ということがよく言われるが、その一つのキーワードになるのは、やはり金日成が生きているあいだに、金正日に正式に移譲したものを異様に肥大化させた政治体制である。通常、共産圏の政治権力は、党、国家、軍が3本柱になっている。金日成も実際3本柱のすべてのトップに立ち、順番に譲っていくだろうと言われていた。最初に党を譲るだろうと思われていたが、実際には国防委員会や軍のポストであった。

先ほどお話したように、天安門事件とチャウセスクの事件が大きく影響したと言われている。結果的に言うと、金日成が生きている間に就いたポストは軍のポストであって、それを異様に肥大化させているが故に、現在も北朝鮮の権力構造は国防委員会が中心であり、権力継承もこの場で行われるだろう。それ故、今年の4月に行われた最高人民会議での張成澤の人事が後継者につながるかは今の段階ではなんとも言えない。少なくとも張成澤がかなりのスピードで軍の中で権力を獲得していることは間違いない。極端な話、今、仮に金正日がなんらかの形で執務不能になった場合、制度的に言えば、おそらく張成澤が権力を維持し行使すると思う。もちろんその場合に、崔英林や呉克烈といった元老を従えるので、今の金正日と同じ体制になるとは限らない。そこで、フィギュアヘッドとして金正日の息子が就いたかどうかは今の段階ではなんとも言えないという状況である。

おわりに

まとめると、核の現状は、本来、中心であるべき問題だが他の問題の影に隠れている。北朝鮮は、確実に技術を向上させていると言っている。例えば、2010年5月12日、哨戒艦問題で国際社会が北朝鮮に対する非難を始める頃で、「独自の熱核反応装置が設計、製作され、核融合反応に関する基礎研究が終わった」「新エネルギー開発のための突破口が開かれ、国の最先端科学技術の発展において新たな境地が切り開かれた」と『労働新聞』に発表している。「核融合技術の独自開発に成功」とは、核、水爆の技術につながるという評価があるようだ。いずれにしても北朝鮮にしてみれば6者会議は再開されず、時間は北朝鮮側にあり、少なくとも核の問題については、自分たちはどんどん進めると、実際に本当に核能力を上げているかどうかの評価は別な話であるが、北朝鮮側はそう主張している。

菅新政権の政策については、先ほども話したが良くわからない。もう少し時間をおく必要があるかと思う。

今後の国連でのやりとりは、中国、ロシアの動向が慎重姿勢であるので、韓国もそれに応じて少し慎重になってきている。さらに、昨日か一昨日の報道によれば、公開の論議はせず、非公開で論議をするという話まで出ているようだ。韓国をずいぶんディスカレッジするような状況が今国連では展開されているようだ。

実は韓国と北朝鮮の間でおかしな事件がずいぶんある。1983年にはラングーン事件があり、韓国のベスト・アンド・ブライテストが爆殺されるということがあった。ところがその翌年からはまた対話路線に戻っている。大韓航空機爆破事件はオリンピック直前の1987年だが、事件が発生しても戦争にはなっていない。韓国の友人に言わせると、これは自分たちが一方的に我慢をしてきた歴史だという。今回の事件もなんらかの形で、韓国が自分で上げたこぶしをどこかに収めなければならない関係になっていくのではないかという気がする。最後、久保先生におつなぎするのにちょうど良い話になるが、やはり朝鮮半島問題は、良くも悪くも北朝鮮がアメリカとの関係を軸にすえているが故、アメリカが今後どういう対応になるのかがポイントになる。それを前提にすると、中国の影響力は客観的にもかなり大きいわけである。中国の北朝鮮に対する姿勢は、アメリカが北朝鮮に対してどう向き合おうとしているのかがかなり重要なポイントになってくる。私が先ほど中国にとっての哨戒艦の問題のポイントは米中戦略・経済対話であろうと申しあげたのはそういう観点からである。

(以上)

※敬称略／役職等は報告当時のものです。

※固有名詞等の表記は、報告者によって異なる場合があります。